資料４－２（別紙）

各会議等での管理のあり方に関する意見まとめ

１．H26 年度 第１回科学委員会での管理のあり方に関する委員意見

・レクリエーション関係のデータが不足しているというのは屋久島だけの問題ではなく、全国どこでも、例えば欧米の水準からいけば、はるかに少ないデータしかないのは事実。ただ、それをもって科学委員会で研究者の立場から何も貢献ができないかというと、そうではない。

・順応的管理という考え方というのは、データが少ないということをある程度前提にしながら、それをどんどん増やしていくことは当然として、限られたデータの中で何を言うかということ。そこからすれば、科学員会としても何らかの提言を今あるいろいろな組織と同時に行うことは可能ではないか。

・今は 30 万人を切り始めている状況の中で、観光以外のブランド化をどう進めていくかというところの議論も話をしていかなければいけない。そういうことまで議論した上での利用の作業部会になるのか、あくまで国立公園の世界遺産地域を中心とした、いわゆるマネジメントの話だけに特化するのかというので、やはり研究者や地元側が考えている望ましい利用に関する作業部会と、行政側が設置した作業部会では、ずいぶん違ってきているというのが個人的な意見。

・なぜ科学委員会でワーキンググループがまだスタートしていないかというと、ワーキンググループに科学委員会としてどういうミッションを与えるかということについて、科学委員会の中でまだ十分な合意が成立していないから。

・島のブランド化ということについても、科学委員会の中ではまだ一回も議論したことがなく、それを科学委員会本体で議論しないうちにワーキンググループに投げてというのは、科学委員会としては好ましくない。

・自然の適正な利用の“適正”とは何かということを科学委員会としてはしっかり議論しなければいけない。また、ブランド化というものを含め、観光のあり方に関して世界遺産地域の外までこの科学委員会がどこまで関与できるのか、関与した方がいいのか、それ自体も科学委員会の中で議論しなければいけない。

・世界遺産地域だけに限定して利用の問題を考えるのは無理だというのが、おおよそのコンセンサス。とはいえ、観光全体にまで議論の幅を広げ、完全に世界遺産という枠を取っ払った議論というわけにもいかない。

・国立公園についても、協働型管理の運営での取組みのなかでは、国立公園外も国立公園に直接関係のあるような、もしくは間接的に関係のあるような観光利用やその他の利害関係があるわけだから、それについては議論の題材として、もっと広い観光地全体を考えて、その中で国立公園の管理に直接関係するところを管理計画という形で抑えていくという方針は提言として出ている。

・実務者が中心になって議論をするのは、検討を効果的に行う方法としては一番ではないかと思うが、透明性と継続性ということになると、非常に問題が起きるのではないかと思う。

・科学委員会をこれから含めても、必要に応じて意見を聴取されるだけですので、全体の構造が良くわからないという問題がありますし、議論の内容は分からないということになると思います。

２．H26 年度 第４回地域連絡会議幹事会での管理のあり方関連の意見

・行政として、利用の管理が行えていないことが問題。

・行政・科学者・民間の３者が揃って議論することが大切。

・世界自然遺産の話と島の観光のあり方は表裏一体。

・大きな方向性としては、「来島者は増やした方が良いが、山に入る人数は今以上に増やすことはせず、安全に楽しく自然を感じてもえるようにして、客単単価をあげるような観光の質の向上を同時にすすめる。」といったことでは。

・科学委員会とは別に、既存の利用に関する会議の構成員全員を呼んで、科学委員会を派遣して、議論するのがいいのではないか。

・５年後、10 年後、20 年後にどうしていくかをビジョンとして示すことが必要なのではいか。

・世界自然遺産の現状の利用や島の観光業の現状の有様について、今のまま進むとどうなっていくかという予想図はできるはず。

・「透明性と継続性の欠如」を御指摘頂いたが、透明性については開かれた会議を設けることで対応できる。一方の継続性については、適正利用とその管理のあり方に関する検討の枠組みのなかに、遺産地域の管理に反映した後の管理運営の仕組みがなかった。

３．利用の管理方法の検討に関する有識者へのヒアリングでの意見

・「将来目標の把握」の練りが重要。ここのステップに中核となるメンバーが欠けてしまうと、その後の進め方が全て破綻してしまう。

・地元の人たちが、自分たちが作った、と思えるものにすることが重要。

・ボトムアップ型とトップダウン型があるが、いずれの場合においても、管理者と現場の双方が上手く回ることが必須。

・検討したものは管理計画に位置付ければ、担当者が変わっても引き継がれる。また、研究者やコンサルタントなど、その検討過程について覚えている人が地元周辺にずっと居続けることも大切。

・国立公園以外のゾーンも重要。知床で利用適正化計画を検討する際には、遺産区域外も含めて「一体的な利用が行われる全ての活動を対象とする」とした。

・検討を進めるにあたっては、各組織の長を集めてもブレイクスルーしないので、若手や現場の意見が重要。利尻では、各団体の長からなる「利尻登山道等維持管理連絡協議会」に対して意見を上げて行く組織として、現場で管理に関わる官民の担当者と有識者からなる「利尻登山利用検討会」を設置して意見交換と検討を行っている。

４．利用の管理方法の検討に関する観光関係者へのヒアリングでの意見

１）行政の課題認識について

・縄文杉登山について１日に 1,000 人以上が訪れるような状況はふさわしくないが、現状としては、以前のような混雑感はない。

・１日の入山者数が 1,000 人を超えるような日は、年に１日か２日。

・ゴールデンウィークと夏休み、三連休の中日などは利用が集中して混雑するが、連休に混雑するのは屋久島に限ったことではない。

・１日 500 人を超えると多いという感じだが、１日 400 名程度であれば問題ない。

・近年は多くても１日 400 人～500 人で、以前は混雑についてクレームが多かったが現在は少ない。

・親戚がシャトルバスの運転手をしているが、今はそこまでの混雑はないと聞いている。

・利用者が増加していて環境に影響が出ているというが、どういった影響が出ているのか根拠が示されていないし、どうなったら問題なのかという基準もわからない。

・行政に「利用者が増えて環境に影響が出ている」というネガティブキャンペーンをされると、屋久島に来る利用者に申し訳ないという気持ちを与えてしまう。

・さらに、行政によるネガティブな印象を与える情報発信の積み重ねで、地域の子供たちやガイド以外の人たちのガイドに関する印象を悪くしている。

・「利用者の増加で影響が出ている」という課題認識を変えて欲しい。

２）検討体制等について

・科学委員会の委員は年に１～２回来島するだけで、あまり現場を知らないのではないか。書面だけ見て議論する科学委員会では何にもならない。

・今回のヒアリングのような場で意見を集めて、利用者の増加・集中が問題だという課題認識の検討から、きちんと議論していく場を設けて欲しい。

・国立公園として今まで以上に質の高い利用体験を提供するというのはその通りで、地元と一緒にやっていくということができれば実現できる。

・行政と事業者、事業者とガイド、さらにはガイド内のリンクが十分ではない。

・一部の関係者だけでなく住民も含めて町全体が一体となって話をしていく必要がある。

・島民の意識を把握して、巻き込んでいく必要がある。集落単位で、公民館などで意見を集めるような機会をつくると意見を聴けると思う。

３）検討の方向性について

・屋久島は環境学習の島として、多くの人に来てもらって、学んで帰ってもらうことが基本。登山素人が来るのが屋久島で、その人たちが自然を好きになって帰っていく場所が屋久島。

・受け入れは大きくして、屋久島で意識を変えてあげるというような方向で議論していくことが必要。

・屋久島の魅力は何か、それを伝えるにはどうしたらよいかを、前向きに捉えた検討をしたい。屋久島を訪れる人にどう感じて欲しいかという認識の共有をすべきである。

・「ここの利用はこうしないといけない」というような共有できるあり方を構築していくことが必要。

・登山道ごとに、利用頻度、難易度、登山者が求めるものにはばらつきがあるので、それを体系的に整理して、登山者と登山道をマッチングするような仕組みが必要。

・画一的な整備するのではなく、特にマイナールートについては、各ルートの厳しさにある魅力を残しておくことが必要。

・観光客だけでなく、地元の子供たちにも屋久島の自然の価値が伝えられると良い。

４）利用の分散について

・利用の分散については、相当慎重に検討することが必要だと思う。

・集中の分散ということが言われているが、利用の分散は興味地点を増やすことになるだけ

・雑誌などでは、散々縄文杉と白谷雲水峡を紹介してきたので、他のルートやコースを紹介せざるを得なくなっているが、そうなるとマイナールートの利用者の増加を招いてしまう。

・縄文杉と白谷雲水峡は一時期の過剰な混雑を乗り切り、ある意味で耐性ができている。他のエリアへの影響を軽減するために、縄文杉と白谷雲水峡はむしろ利用が集中してよいエリアとして位置付けて良いと思う。

・一方で、縄文杉についても人が多いという印象を低減するような手立ては必要。利用の時間枠を広げるなどの方法が良いのではないか。

・避難小屋に泊まる人は混雑を避けて下山するようになっており、時間帯をずらすような利用のあり方も見られるようになっている。

５）現状の課題について

○ 登山者への情報提供

・メディアの影響が大きいのか、若い世代は簡単に山に入ってしまう。

・縄文杉トレッキングということが宣伝されて、今は登山の経験が全くない人が屋久島に来ている。

・SNS やブログで「縄文杉は混雑するから行かなくてもいい」とか、「こっちのルートが良い」という文字情報だけで、山の状況がどうなのか分からないまま安易にマイナールートに入り込む場合が多い。

・本人が行ったことがないのに民宿などでリスクのあるルートを薦めている。

・マイナールートに行く人が増えてきている。行方不明や死亡事故は増えていないが、潜在的なリスクは増加している気がする。

・白谷雲水峡から縄文杉のコースは、その日のうちに戻ってこられないようなリスクのあるコースだが、旅行会社がツアーとして販売している。しかし、ツアー参加者は難易度やコースについて理解していない場合が多い。

・縄文杉ルートなどについて、旅行会社がその大変さをきちんと伝えていないため、旅行会社を介して来る人は、どんな自然の中に入っていくのかをわかっていない。

・宿泊施設やレンタカー会社などの交通事業者には、山に入ってある程度の知識を得た上で利用者に情報発信をして欲しいのだが、現状を知らないのではないか。

・観光協会にある各部会の間で問題認識を共有することができていない。

・情報が氾濫しているため、利用者に判断能力が無ければ、危険なこと、オカシナことになる。

・中立的で信頼の高い行政が情報発信に力を入れてもらえると大分違う。

○ 長時間登山

・通常の登山は６～７時間だが、屋久島はそれを超える 10～12 時間という長時間が当たり前になっていることで、色々な問題が生じている。

・長時間での行程となると、ガイドが行うことは単なる時間管理、行程管理になりがちで、エコツアーではなくなってしまう。

・本来日帰りで行けるような場所でないのに案内をすることになると、ガイドもボロボロになるし、お客も楽しめない。

・ツアーの団体に入ってしまうと、遅れた場合に置いて行かれるため、山の中でガイドとトラブルになることもある。